

9 華岡青洲の「乳巖治験録」の新研究

呉秀三の復刻文に対する疑義

松 木 明 知

近世の日本の医学史で特筆すべき人物の一人としてま
ず紀州の華岡青洲(三代隨賢)があげられると思う。その
評価は二十世紀最終年においても何ら変わるところがな
いことは、日本外科学会が今年一〇〇周年を迎え、その
記念行事の一環として記念切手の発行を企画しその図案
に華岡青洲を採用したことによっても理解される。

さて青洲の数多い業績の中で群を抜いて高く評価され
ているのは、経口全身麻酔薬「麻沸湯」(一名通仙散)の開
発とその臨床応用であろう。それによってそれまでだれ
もなし得なかつた数多くの手術を行い、難病・奇病から
人々を救つたことである。その中でも青洲がとくに関心
を寄せたのは、直接的に「麻沸湯」の開発の契機ともな
り、それ故に「麻沸湯」を用いての最初の全身麻酔下の

手術であつた乳癌に対する手術であつた。

右の乳癌に対する最初の手術については、青洲自筆と
される「乳巖治験録」が現存し、奈良県の天理大学図書
館に所蔵されている。この「乳巖治験録」に関しては、
今なお華岡青洲研究に関してはバイブルとされている呉
秀三の著書「華岡青洲先生及其外科」(一九三三)中に詳
細に論述されている。

呉は右の著の中で、青洲の「乳巖治験録」を活字化復
刻しており、後続の諸研究者は、この呉の復刻した「乳
巖治験録」を史料として用いて研究を進めた。例えば、
石原明は昭和三十八年に「華岡青洲—日本臨床外科の創
始者—」(漢方の臨床十巻九十号)を発表した。参考文献
の(四)に天理図書館蔵の「乳巖治験録」を示している
が、実際には呉の復刻した「乳巖治験録」を史料として
用いていることは、呉の誤りをそのまま踏襲しているこ
とによつて明らかである。さらにその後発表された諸家
の研究、例えば森慶三らの「医聖華岡青洲」(一九五四)、
南圭三らの「華岡青洲」(一九六三)や、宗田一による一
連の研究においても同様に、青洲自筆とされる「乳巖治

「験録」を実見せず、あるいは実見したとしても精査せず
に、呉の復刻した「乳巖治験録」を用いていることは、
いづれも呉の犯した重大な誤りが全く言及されず、その
まま看過されていることによつて証せられるのであろ
う。演者は三十数年前、天理図書館から「乳巖治験録」
のマイクロフィルムを取得し詳細に検討した結果、呉の
復刻文に重大な誤りがあることを見出ししたが、諸般の
事情のため、発表を控えてきた。今回その時期が来たと
思われるので発表する。

呉の誤りは多く指摘されるが、まず第一は乱帖の問題
がある。稿本「乳巖治験録」は全部で七枚であるが五枚
目と六枚目が入れ代わっている。もちろん呉の活字化さ
れた文は乱帖が直されているか、少なくともこのことが
言及されていなければならぬと思う。第二は呉の復刻
文における原文脱落の問題である。例えば四枚目の表で、
「今此乳岩也未潰爛 紫黒著 則施術可也」の十八文字は
呉の文になく、また四枚目裏の「我今」も脱落している。
第三は改竄の問題である。四枚目表三行目の上から三字
目は、稿本では「勘」であるが呉が写真でも示している

文字は「如」である。呉がなぜ字を改めてまで写真を取
ったのか、理解に苦しむところである。

以上の他にも数多くの誤りが指摘される。このように
呉の復刻した文には多くの誤りがあり、引用するに際し
ては注意を要する。

呉がこの年紀を欠く稿本を読んで最初の乳癌の手術の
期日を不用意に文化二年(一八〇五)とした。この文化二
年説が広く流布し、演者の研究によつて訂正されたのは
約半世紀後であった。青洲による最初の全身麻酔下の乳
癌の手術が行われてから間もなく二〇〇年を迎えるが、
改めて華岡青洲の研究において根本的見直しが必要と考
えられる。

(弘前大学医学部麻酔科)